

社団法人 日本図書館協会 図書館学教育部会

会 報 第14号

昭和57年3月31日発行 編集・発行 図書館学教育部会

第13回図書館学教育研究集会 盛大に開催

図書館学教育部会恒例の第13回図書館学教育研究集会が去る昭和56年8月28日～30日にわたり、富士吉田市の人材開発センター富士研修所において開かれましたが、参加者は延46名で近来にない盛会でした。

今回のテーマは、第12回の研究集会に引き続き、「図書館学教育におけるカリキュラムの構築をめぐって—そのⅡ—図書館学教育においてコンピュータ教育をどのようにとり入れるか」をとりあげました。

第1日（8月28日）は受付・開会あいさつ・オリエンテーションのあと、紀伊国屋書店国際情報部 三浦勲氏・坂元康雄氏の両氏にお越しいただき、実際に端末機を用い、アメリカ・ロッキード社のデータベース（DIALOG）による情報検索のデモンストレーションを実施しました。

参加者の方々の中には、コンピュータによる情報検索を初めて見た人々も居り、三浦・坂元両氏を囲んで熱心に説明に聞き入ったり、いろいろ質問したり、デモンストレーション終了後も端末機に触れてキイをたたくなど、大変熱のこもった一刻でした。

また、夜は食堂で懇親会がおこなわれ、暮れなずむ富士山麓の景色を觀賞しながら、楽しい語らいの一刻を過しました。

第2日（8月29日）はまず午前中、松井幸子氏（図書館情報大学）、細野公男氏（慶応義塾大学）両氏により、それぞれコンピュータ関係の授業科目を中心とした両大学のカリキュラムの紹介・説明があり、質疑・討論をおこないました。両大学とも図書館・情報学を主専攻とする大学であるため、多くの人々

の関心を集めました。

午後は、図書館・情報学を副専攻としている、いわゆる司書課程をもつ大学の一例として中嶋正夫氏（大谷女子大学）がまず、わざわざ携行して下さったマイコンを使った情報検索に関する授業の実際の紹介と参加者によるプログラミングや実技についての指導があり、これまた、大変な人気で夜学(?)にはげむ参加者も居ました。ついで、コーヒーブレイクのあと、上記3名の養成機関側からの発表を承け、これら養成機関の卒業生の受け入れ側として、石川亮氏（筑波大学図書館部）による同大学図書館のTULIPS システムの紹介、森下四郎氏（前愛知県教育センター教育情報研究室長）による同センターのAIDOR システムの紹介があったのち、両氏から養成機関に対するコンピュータ教育に対する提言がありました。

第3日（8月30日）は午前中、28・29日の発表・討議を承け、井出翁氏（東洋大学）司会の下に総括討議がおこなわれ、ついでビジネス・アワー、閉会の辞のあと散会、帰途に就きました。

なお、細野・中嶋・石川・森下各氏の発表要旨と総括討議の概要は別に掲載しましたので御参照下さい。最後に発表・司会の労をとられた松井・細野・中嶋・石川・森下・井出の各氏および記録をまとめて下さった石川徹也（図書館情報大学）、渡辺信一（同志社大学）、丸本郁子（大阪女学院短大）、田口瑛子（京都精華大短大）、平野英俊（日本大学）、常盤繁（独協大学）の各氏に厚くお礼申し上げます。



第13回図書館学教育研究集会記録

(1) 第2日 8月29日(土) 10:35~11:35
慶応義塾大学文学部図書館・情報学科
カリキュラムの説明

細野公男氏(慶応義塾大学)

発表内容

当学科は、慶応義塾大学文学部内の一学科である。学部・修士・博士課程までであるが、今回のカリキュラム紹介は、学部課程の内容のみとする。

当学科の学生は、1年次における一般教養修行後、2年次になる時点で専門学科を選択した者である。そこで、2年次から専門科目の教授を行うことになる。また、3年編入(学士入学)の門を開いている。

履修単位は、次のようになっている。

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1) 専門必修科目: 28単位 | } 72単位
以上 |
| 2) 専門選択科目: 18単位以上 | |
| 3) 関連選択科目: 26単位以上 | |

1) の専門必修科目群は、資料組織系列、資料論系列、情報システム管理系列に大別されている。2年次では、このうち基本的科目を履修し、原則として3年次までにすべての必修科目を履修していなければならない。

2) の専門選択科目群は、1) の専門必修科目群の3系列の内容を、それぞれ次のように科目展開し選択できるようにしている。資料論系列では人文・社会、科学・技術、視聴覚、児童・青少年関係資料を、資料組織系列では、情報検索、主題分析、書誌記述法を、情報システム管理論系列では大学、専門、公共、学校、児童図書館に細分化を図っている。さらに当該分野の特定の今日のテーマを深く掘り下げる図書館情報学特殊がある。

3) の関連選択科目群は、主題知識を得させることを目的に、2年次から卒業するまでに文学部および付属研究所の講座科目を履修

させるようにしている。

以上の学科目構成の中で、今回の研究集会のテーマである情報処理技術に関する学科目については、次のように展開している。

まず、当学科の情報処理技術に関する教授目的は、記録情報の伝達・変換・蓄積・利用について情報学的側面からアプローチすることに置いている。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1) 情報検索論 I | } 各科目とも
選択2単位 |
| 2) 情報検索論 II | |
| 3) 資料組織論 II | |
| 4) 図書館・情報学特殊(F) | |
| 5) 図書館・情報学特殊(G) | |
| 6) 図書館・情報学特殊(H) | |

1) の情報検索論 I では、文献検索システムの全体像の構成の理解を目的に、利用演習を DIALOG (ロッキード) , UTOPIA (筑波大) のシステムを使い並行し教授している。特に、演習によって、システム構成、特性の比較、文献データベースの相異 (ERIC と LISA) について考察させるためにレポートを課している。学生 1 人 1 人が自分で端末を操作し、情報検索を行なう方式をとっているので金がかかりすぎるという問題が生じている。そこで現在情報検索用のトレーニングシステムの開発を行っている。

2) の情報検索論 II では、Library automation について、その中で特に JAPAN MARC の使用可能性について現在教授している。

3) 資料組織論 II では、文献データベースの内容について解説・教授する。

4) 図書館・情報学特殊 (F) では、情報処理技術および機器の解説、特に図書館のオフィス・オートメーションについての考察・教授をしている。見学も頻繁に行なっている。

5) 図書館・情報学特殊 (G) では、特に日本語処理技術について教授する。

6) 図書館・情報学特殊(H)では、特にインデックスングのプロセス、数値データベースの利用について教授している。授業の一環として端末も使用させている。

また、今年4月から、図書館・情報学特殊の1つとして、外部にも公開する科目を設置し教授している。今年度は、医学・医療情報について行っている。

なお、コンピュータおよびプログラミングそのものに関連する科目は、当学科では行なわず、慶応大学の附属研究所である情報科学研究所の講座科目を履修するよう指導している。この場合、8単位までを選択科目として認めている。また、当学科では端末を使用する機会が多いので、英文タイプの修得を学生に強く指導している。

現在、当学科で所有している情報処理関係の機器類は、次のとおりである。

- 1) 公衆回線用ポータブル端末機：1台
- 2) パソコンPC-8001(音響カバー付)
：1セット

パソコンはまだ授業では使用していないが、将来は授業だけでなく、例えば調査結果の処理・分析に学生が自由に利用できるようにすることを考えている。

なお、8月から、第2期のCAPTAINの実験校になっているので、利用についてこれから考えていきたいと思っている。

質 疑 応 答

高宮秀夫(早大)：関連選択科目のA群(文学部科目)とB群(他学部および付属研究所の講座科目)を、主題知識の修得の重要性から考え一つにしたらどうか。例えば、資料選択といった図書館プロパーの知識に対する教授はたいせつであると思うが。

細野：主題知識の修得について確かに重要である。いかにカバーさせるか今後の問題にしたい。

源昌久(淑徳大)：確かに情報処理技術関係

の科目は強いが、図書館学の根幹を成す方法論的な科目および歴史的な側面の科目が少なすぎるような気がするが。

細野：スタッフの関係もあって、確かに少なくなってきた。方法論については、大学院の授業および図書館・情報学特殊でカバーしている。なお学部については、卒業論文を通して指導している。

森崎震二(専修大)：源先生に同じく、図書館学の中で重要な図書館政策については、どのように行っているのか。

細野：具体的には展開していない。ただ、情報システム管理論系列で、館種別に教授しているのも、その中で一部行なわれている。

(2) 第2日 8月29日(土) 13:30~14:40

マイコンを使っての情報検索の実際

中嶋正夫氏(大谷女子大学)

司書課程の「情報管理」の授業で、マイコンを使って情報検索の実習を実施している中嶋氏により、前半は授業カリキュラムその他の説明があり、後半は、別室にてJOISによる検索の実際が行われた。以下、前半を紹介すると、

まず大谷女子大学の概要説明あり、受講生は国文の学生が半分を占める。司書課程を履修することにより図書館の良き理解者になって欲しい。マイコンを操作する能力を身につけることにより、就職に際して条件が有利になれば好都合だが、つとめ先では少なくともコンピュータのことに憶せず、会話ができるようにしたい。

一般教養として、物理・数学と並んで「情報科学」(中嶋氏担当)が開講されており、1~2年生のときに受講している。従って「情報科学」がバックグラウンドとなっているが、同時に英文タイプが打てるように、3年生の目録の授業でC・D一級をとらせる。

当授業(「マイコンによる情報検索のモデル実習」)は、4年生(受講資格は、司書課程受講生のうち「情報管理」を履修している者)の後期に行われ、本年度(昭和56年度)は、受講生が40名である。

当授業の目的は、将来、中規模図書館の司書として、コンピュータの導入や、操作にあたっての基本的な理解(知識と実技)をもたせることにある。そのために(1)マイコンやオフコンを使用して、実演や実習をさせる。(2)図書館業務として<A. 購入事務 B. 貸出業務 C. 情報検索>へのコンピュータ利用に対しての知識を習得させる。(3)将来のコンピュータ・ネットワークへの具体的なイメージがつかめるよう、情報検索モデルを習得させる。

現在の使用機種は、マイコン：シャープMZ 80(8台)、ミニコン：ファコム・メート(1台)、オフコン：トスバック・エース55(1セット)である。

なお、中嶋氏の発表は、大学におけるコンピュータ購入のためのノウハウや、シラバスの概要*にそって"BOINプログラム"など、実際の授業の中でのトピックをユーモラスにかつ分かり易く紹介され、固苦しさが払拭された、愉快的な雰囲気の中に終始した。と同時に、未実施の大学においてもコンピュータによる実習を身近に感じさせ、実現可能な展望をもたせるに十分な、明るい、参考になる材料を提供したものと見える。

*シラバスの概要は、次の通り。

1. データ形式の理解のために

(1)原始データ……「購入伝票」の設計 (2)入力データの種類……数値(整数, 実数) 文字例 (3)入力データの形……キー, カード, 紙テープ, 磁気テープ, ディスク

2. プログラム言語の習得と理解のために

(1)マイコン用「BASIC言語」の習得 A. 単純計算プログラム(外部入力) B. 判別プログラム(IF文, GOTO文) C.

累計・平均プログラム D. 個人リスト作成プログラム(文字例, FOR文) E. 採点プログラム(DIM文, 一覧表) (2)その他の言語による実演 A. FORTRAN 言語とミニコン(BOINプログラム) B. COBOL言語とオフコン(ANKETOプログラム)

3. コンピュータ操作の実習と実演のために (1)オペレーティング・システム(OS)の理解 (2)各種コマンドの理解と実習 (3)マイコン中心による外部記憶装置の利用実習(大量データの処理)(プログラムの保存・データ保存)

4. 図書業務用プログラムとシステム設計のために

(1)購入事務 A. フローチャート作成 B. モデルプログラムの実習 (2)貸出業務 A. システム設計 B. フローチャート作成 C. モデルプログラムによる実習 (3)情報検索 A. システム設計 B. 複数プログラムとJOB

5. 情報検索とネットワークのために

(1)JICSTモデルによるマイコン実習 (2)JOISの理解(コマンド・論理検索・効率) (3)ネットワーク論(データベース)

以上のような授業進行により、図書館サイトからみたコンピュータの導入知識、操作知識を習得させることを目的とした実習を行っている」と発表された。

(4) 第2日 8月29日(土) 15:00~16:00

図書館学教育におけるコンピュータ教育に対する提言

石川 亮氏(筑波大学図書館部学術情報課長)

筑波大学図書館で用いているオンラインのトータルシステム(TULIPS)の責任者とし、その現場経験からの提言がなされた。

図書館システム化には、そのシステムの基

本設計・詳細・コーディング・データ作成・入力・出力の各段階があるが、そこに図書館職員とシステム・エンジニア（SE）及び情報科学者のいずれがかかわるかには五つのパターンがある。

筑波大学のTULIPSの場合、図書館職員がどのような形でかかわってきたかを実例をあげて紹介。貸出システムの部分は、基本設計を職員が、詳細・コーディングをファコムのSEが行い、収書速報は全てを情報科学者（学術情報処理センター教官）が行い、自動帳管理システムの部分は全過程を図書館職員が行った。オンライントータルシステムとしてのTULIPSは基本的な所は情報科学者が作り、その他の所は職員が出来るようになっており、この方式がこれからの図書館業務全般の機械化には望ましいのではないか。館内の人事異動で、新しい職員がシステム開発部に配属されても、マニュアルを見て、その業務を行えることが必要である。

筑波のレファレンス・ライブラリアンはこれまで、JOIS（Ⅰ、Ⅱ）、DIALOGを含めて5通りの検索システムを用いて検索を行って来たが、そのコマンド体系はそれぞれ異っている。基本的なコマンドを一つマスターしている必要があると同時に、応用して操作出来る力がほしい。

以上の経験をふまえ、これからますます各図書館が電算化されていくことを思うと、そこで役立つ図書館職員の養成には、次の各点を考慮した教育が必要である。

1. 情報検索論。
2. 書誌データの情報検索。
3. 索引誌・抄録誌・シソーラスの構成理解。
4. 上記のツールは次々と改訂されていくが、常に新しい情報をキャッチしていく能力。
5. 基本的な端末機器の操作。新しいタイプのものもマニュアルを見て、応用し扱

う力。

6. ユーザー言語（簡易なプログラム言語）を用いてプログラムを作る訓練。

以上の基本点に加えて、更に上級コースの者には下記のものも加えてほしい。

7. インテリジェント・ターミナルを用いて簡易なシステムの開発が出来る力。
8. データベースの理解。
9. 館の中心となりシステムを作りあげていく能力を持つ者も、少数でよいが、養成する必要がある。

(3) 第2日 8月29日（土）16:00～17:00
図書館学教育におけるコンピュータ教育に対する提言

森下四郎氏（前愛知県教育センター
教育情報研究室長）

愛知県教育センター教育情報システム（AIDOR：APEC In-line Document Retrieval System）の開発責任者としての経験から、11p.にわたるシラバス（①我が国における教育情報システム開発の状況；②AIDORの概要；③図書館学教育におけるカリキュラムの構築をめぐる提言）に基づき、提言がなされた。①、②ではAIDORシステムの成立過程・システムの概要について説明、特にシソーラスの作成に関する苦心に重点が置かれた。③は「情報管理概論」といった科目の中での「情報検索」についての試案であり、

- 1) 情報検索の概要
- 2) 情報検索システム
- 3) データベースの作成
- 4) 教育シソーラス
- 5) 検索方式（ファイルの検索方法）
- 6) 検索論理
- 7) 検索システムの評価
- 8) 情報検索の用語

実習

から構成されている。

図書館の機械化が進んできており、図書館学でも情報科学の観点からのアプローチを無視できなくなってきた。今後の図書館情報学の担い手としてのライブラリアンやドキュメンタリストは、情報学サイドでシステムをサポートするシステムエンジニアと協力してやってゆかねばならない。ここで図書館員養成に関して特に希望することは「情報管理概論」において次の事項に重点を置いてもらいたいことである。

- 1) データベースの考え方、特にデータ構造の理解。
- 2) シソーラスの概念の把握。
- 3) 検索の理論（「資料組織法」の延長線上でとらえ理解を深める）。
- 4) コンピュータ機器についての基本的知識。
- 5) ブール代数・アルゴリズム・フローチャートの理解。
- 6) 実習（たとえば、どのような手順でコンピュータにデータを入れるか、といった体験ぐらいはしておいてほしい。理論はもちろん必要だが、現実的・生産的な面も大切なので演習・実習の単位を増してほしい。）

(5) 第3日 8月30日(日) 9:00～10:30

総括討議

〔司会〕 井出 翁氏(東洋大学)

井出：今回の研究集会のメイン・テーマは、図書館業務のコンピュータ化に対応するために司書課程で何をどの程度まで教えていくべきかということであった。第1日目にDIALOGについての説明があり、昨日は教育の現場の代表から実践例の報告が、また受入側からは採用しているシステムの説

明と、司書のもつべき知識について教育現場で考慮してほしい点についての提言があった。今日はこれをふまえて討議を進めたが、その前に問題点を整理しておきたい。

- (1) 図書館法による19単位という現状のシステムの中で提言を受け入れていくとするならば、どのような方法でどの程度受け入れていくべきか。それは単一科目として新たに加えるべきものか。単一科目として扱うのであれば、マイナーな変化ではすまなくなるであろうし、どういふ科目でどのような形で行うか。また演習はどのようにするか、問題が生じてくる。
- (2) 誰がどのように教えるのか。また、時間配分はどうするかという点も問題である。
- (3) 図書館業務にコンピュータを導入する上での基本的な考え方や考慮すべき関連要素について教えていかねばならないが、どのように取り入れていったらよいか。
- (4) コンピュータには情報処理の機器としての面と教育用機器としての面と、この二つの側面が同時にあると考えられる。第一の側面については、図書館は情報処理機関である以上、その機器であるコンピュータについて図書館情報学の中で教えていかねばならない。
- (5) 第二の側面では例えば、分類、目録、レファレンスの教育にコンピュータを使うということが考えられないだろうか。『日経ビジネス』（1981年8月24日号）には、アメリカで学校用パソコンが急伸張していることが報じられており、従来の読み書き算盤(3R)に加えてコンピュータを使いこなす能力の必要性が説かれている。こうした社会的潮流を我々はどう受けとめたらよいであろうか。
- (6) コンピュータについて教えるには新しい発想からの教え方が必要である。サー

ビスとして提供する場合、システムの変更は混乱をまねくため、あらかじめ十分な検討が必要であり、そのためには基本的な考え方を教えておく必要がある。また、public acceptanceという考え方からすると、利用者はある一定のステップをふまないと新しい機器を受け入れようとはしないものであり、ただロッキードのDIALOGがあるというだけではそれを使おうとはしないという問題がある。

- (7) 解決すべき問題には時間的要素や経済的要素、さらにはプログラム言語の教育などが含まれる。プログラム言語の教育はかなり厳しい問題であるが、時間のかからないやり方として、基本的な考え方だけを教え、あとは学生の自由時間の中でビデオによる自発的学習をさせるという方法をとることも考えられる。

次に、昨日御発表頂いた方々から、補足説明することがあればお願いしたい。

石川亮：私の提言は、書誌データのネットワークが5年程度先に実現することを予想して述べたものであり、そうなると図書館での利用が増えるので、図書館学教育の立場で考えて欲しいということであった。更に19単位中での要望と、時間の余裕がある場合の要望とをわけて述べたつもりである。

又、TULIPSシステムについて付け加えるならば、これは計算機システムは3年に1度程度の更改が行なわれるものであり、大型コンピューターが変わってもVersionがあまり変わらず苦労しなくて済む基本設計がとられている。

森下四郎：新しいことをやるのは正直しんどいもので、それを上回る気力とヴィジョンとが必要である。コンピューターは食わずぎらいが多い。我々の方から近寄っていく必要がある。愛知県の高校には120台のマイコンが配備されており、又婦人層のコン

ピューターへの接近も高まりつつある。テレビでもマイコンの講座が行われたり、その講師が婦人であったり、状況は変わりつつあるのである。

図書館学を図書館情報学へ引っぱっていく力は図書館学担当者である。図書館学をベースにして、情報学サイドと手を携えて進めていくことが望ましいと思われる。

AIDORのプログラム言語としては二次検索にCOBOLを、その他にはアセンブラを用いている。

最近ではプログラム言語を習った学生が多くなってきているが、その修得には時間がかかりコンピューターで落伍者が出やすいのはやはり言語の問題であろう。従って余裕があって大学でこれができれば、鬼に金棒、ベターではなくてベストだと思う。また、アメリカの3R運動の延長としてコンピューターを考えれば、これを学校で取り入れていくことが望ましい。

中嶋正夫：図書館側で大事なことは、DIALOGに入っているデータ・ベースがどんなものかの理解である。したがって、抄録誌や索引誌をよく使えるようにした上で、これが機械に入ったら便利だと思わせることが良いのではないかと。

カリキュラムとしてはレファレンスの一端として、二次資料を利用した検索を実習しておけば、後はBASICだけでも理解させれば、コンピューターはどのように動くか理解できるのではないかと思う。

松井幸子：基本的なプログラムについての考え方など、図書館員として共同作業ができる範囲でのミニマムを教えることが図書館学サイドの守備範囲であろう。理学部でコンピューターを学んだものと、図書館学とあわせて同時に学ぶ人とは当然違いがあるはずであり、そこに独自性があるものと考えている。全国の司書課程で実施する場合は、電子工学の専門家との協力で実施し

ていくという程度の目標でよいのではないだろうか。

弥吉光長：講師の話を知っていると今までやってきたことが間違いだったような気がする。私は参考業務と情報検索を担当しているが、最低のところまでやってきているので、今後それをどう改めていくべきかについて考えてみたい。先ず参考業務では、二次資料、書誌の実物を見せながら、演習で問題を与えたり、自発的にやらせたりしている。これは学生の卒論にも役立つという副次的効果もある。次に情報検索では、先ず歴史と理論をやり、それから機械へと話をすすめている。ただ大学には1台のマイコンしかなく、それで図書の貸出しなどの事務と論文検索をやっているため、そばで見ているだけというのが実情である。講師の話は理想であって、与えられた時間はあまりに短かく、能力は低いという所でどうやっていくかが難しい問題だ。やはりマイコンは使わせなければだめだし、更に時間外を利用してタイプライターも使わせなければならぬだろう。又短大では英語も必要で、私の所では「図書館の英語」の時間を設定している。となると情報検索は夏期講習にでも回さなければならぬかもしれない。

菅原通：私は分類理論と学校図書館を担当しているが、分類理論の講義の中でコンピュータの使用が考えられるのではないかと思う。一般に分類の講義では、分類表の比較検討が中心を占めているのではないかと思うが、私は最初に内包と概念などの概念論をやり、次に論理和、論理積など概念と概念との組合せの話に進んでいる。ここでコンピューターとの接点が登場してくるのであり、マイコンの利用が考えられると思う。又件名の講義でもソーラスとの関係で、DIALOGの利用などが考えられるだろう。更にこのDIALOGは主題による検索ということで、レファレンスでの利用も可能だ

ろうが、これと新しい情報検索とどう統合していけるか、今後の課題である。

石塚栄二：伝統的な図書館学の中で育った者にとっては、大変なことが起っているという気がしている。先ず第1に、コンピュータの知識が3R'sであるならば、これは基礎教育であるということになる。そして外国語教育と同じような基礎教育の1つとしての観点から考えるなら、司書課程の中でのみ扱うのではなく、大学教育一般の中に組み込んでいくように、図書館学の方から大学へ要求していくという方向が考えられるだろう。そうすれば他コースからの司書課程への目も資格付与というだけでなく変わってくるかもしれない。そして図書館学としては、19単位にとらわれない形で、その教育の中へとり入れていくということが可能だろう。

第2に、JLA自由委員会では、国民総背番号制、ISBNの問題、更に現在は貸出のコンピュータ化への住民の不安といった問題を扱っており、プライバシー保護の基準作りの作業中であるが、それらと今回のテーマとの関係はどうかということがある。コンピュータについては技術の問題ではなく、いかに使いこなすかということが重要であり、奉仕論、管理論の中でそうした見方を教えていく必要があるのではないか。

第3にData Baseの拡大に伴って、それから取り出されたものが情報の全てであるという幻想が生み出される可能性についても教えておかなければならぬであろう。

森崎震二：公共図書館を勉強しようとする者にとって、慶応ではそのカリキュラムの中に公共図書館の観点がなくて困るという話を聞く。コンピューターに傾斜するあまり出版流通の社会的問題や予約制度の存在すら知らない学生が多くなっている。現在の図書館業務に対する国民的認識はまだまだ

低いというのが実情である。コンピュータの問題も、図書館行政、政策を考えていく文脈の中で考えるべきだと思う。次に卒業生の中で図書館で働く希望をもつ者が、その半数も願いがかなえられないという問題がある。全ては公務員試験を受けて後の問題であり、公共図書館を学んできたということではテストしてもらえないという現状をなんとかしなければならぬだろう。現場で使ってもらえないのであれば教えたかきが無いといわざるを得ない。要するに、全体的な流れの中で問題を考えていく必要があると考える。

伊藤松彦：私の所では秘書の課程があり、その中で一般教育として電算化の講義があるが、この方向も見定めておく必要がある。図書館学で教える場合、情報検索と、貸出しのような日常サービスの面があり、また不便な地域でのファクシミリ利用などの問題がある。国民の資料要求に答えるという面から、コンピューター問題を考えることが必要だ。実習の中で貸出しについてふれるが、コンピューターを実際に使いたいという学生は多い。しかし、書誌・索引の利用という面からそのシステムの面に立ち入ることは現在できない。

石川徹也：問題は、information proper を育てるのか、library proper を育てるのかということであろう。コンピューターは tool なのだから、図書館だけがコンピューターを考える必要はないということを前提にした上で、私は先ず使い方を教えるのは当然だと思う。そして、次に作り方を教えるべきかということになるが、図書館は出版物を利用に供する施設であるということ、扱う物すなわち出版物について教えているのであるから、コンピューターのシステムの作り方まで教えるべきだと考える。

京藤松子：コンピューターの問題は、石塚氏の発言にもあったように図書館だけで論議

する問題ではないと思う。又、今後の傾向として中嶋氏の実施しているマイコン教育は、小・中学校にまで下りていくかもしれない。また短大で19単位の中で考える場合、利用のレベルとシステム作成のレベルと区別して考える必要がある。

次にData Base からとり出すだけではabstracts にすぎないのであって、レファレンスとしては一次資料の提供までいくことが必要だ。

石川徹也：カリキュラムの範囲についてだが、自分の大学ではこういう方針でこの科目はやっているが、これはやっていないというだけでよいのではないか。司書課程間での役割分担があつて然るべきで、ある科目を置いていないからといって批判はいらないと思う。

田口英子：システムの作り方まで教えるというのはもともとと思うが、そもそも図書館のシステム自体をきちんと教えているだろうか。図書館員が今後も細かい技術だけでやっていくのでは、システムを動かす人間でなく、常に小間使的な存在に止まるであろう。すでにある道具を素材に自分の想像力で得た認識を基礎にして、他の専門家との協力でやっていくことがよいと思う。

石川徹也：計算機の教育にも哲学があるという人もいる。私自身はプログラミングを教える必要はないという意見であり、それはマニュアルをみればできるものである。私は現在あるプログラム言語はすべてできるが、それは独力で身につけたものである。他方それでも細かい点はマニュアルを見なければならぬ。

大学では基本的な言語は教える必要がある。しかし何よりもシステム自体の思想を考えることが重要である。

田口英子：図書館学はこれまで業務をあまり分析的に考えてこなかったが、コンピューターによって、その点を考えるようになって

きたのはメリットだと思う。

黒坂東一郎：私大連盟の会合では、コンピュータは図書館学に不要であるとの意見があった。コンピュータは手段であり、図書館学で必要なのは図書についての基本的な知識であって、それを基礎にコンピュータを使うという結論であった。ところで、現場では1人の職員を採用することは1+1=2ではなく、3ないし4になることを期待している。就職後、伸びて欲しいのである。

コンピューターのことは、19単位の枠の中でなくてもよいから、図書館学の中でやるべきではないか。そのためには単位数をひろげてよいのではないだろうか、たとえ手段であっても、そうした中で大きな戦力となる職員を養成して欲しい。

石川亮：図書館としては、これまでの専門とは異なる領域にも積極的に取り組んでいける人間を養成して欲しいと思う。図書館は決してひまな所ではないし、何でもやってやろうという人間が必要である。第2に、コンピューター化、レファレンスは必要だが、同時に一次資料にたどりつくということも、見のがすことのできない重要なものである。大学図書館はどこでも、要求のある本は買うようにしているが、そのことを知らない学生が多い。オリエンテーションを充実し工夫する必要がある。

井出：総括討議の総括は敢えてしないので、各々がこれら発言を受け止めて検討し、解決を図って欲しい。

全国図書館大会図書館学 教育分科会開かる

昭和56年度全国図書館大会は、埼玉県浦和市において、10月29日～31日にわたり開催されました。第2日目(10月30日)は例年どおり分科会がもたれましたが、第9分科会と

して「図書館学教育分科会」(於：浦和市民会館)が65名の参加者を得て「関東地区における図書館学教育の現状と課題」をテーマとして開かれました。

午前中は、渡辺信一氏(同志社大学)を司会者とし、常盤 繁氏(独協大学)から関東地区の公共図書館350館を対象とした「図書館職員の採用制度に関する調査」報告があり、活発な質疑・討論がおこなわれました。この調査は一昨年鹿兒島大会における九州地区公共図書館の採用制度調査につづくものであり、今年は福井大会の際、東海・北陸地区の調査を実施する予定です。

午後は、今 まど子氏(中央大学)を司会者とし、採用者側から武田英治(元神奈川県立図書館長)、鈴木英二(野田市立興風図書館長)、戸田一雄(新座市立中央図書館長)、鈴木幸平(日本人事試験研究センター)の4氏をパネラーに迎え、「現場からの望ましい図書館職員像と養成制度の在り方について」パネル・ディスカッションがおこなわれました。武田・鈴木(英)・戸田の三氏は公共図書館長としての立場から、鈴木(幸)氏は、かつて人事院の国家公務員(図書館学)採用試験を担当した経験から、それぞれ図書館専門職員の在り方および専門職員を採用した場合のメリット、ディメリットや今後養成機関に望む点などを発表され、これまた、活発な討議がおこなわれました。

以上の図書館学教育分科会の詳細な討議経過は「昭和56年度 埼玉 全国図書館大会記録」(同 大会実行委員会)に掲載されていますので御参照下さい。

訃 報

前回の会報発行以後(昭和56年7月)本年3月迄に、次の部会員の方々が逝去されました。ここに謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

黒木 努氏(図書館情報大学)

西藤寿太郎氏(帝塚山学院大学)

石塚 正成氏(亜細亜大学)

なお、三氏を追悼した記事に

黒木 努氏を悼む (加納正巳 図書館雑誌 昭和56年9月号)

館界の巨星 また一つ墜つ—西藤寿太郎先生の足跡に憶う (尾原淳夫 図書館界 昭和57年3月号)

故石塚正成教授を悼む (室伏 武 図書館雑誌 昭和57年3月号)

があります。

特に、故黒木 努氏は当部会の幹事、選挙管理委員会委員長、図書館学教育全国計画委員会委員長などを歴任され、当部会の発展に多大の功績を残されました。

部会からのお知らせ

図書館学教育部会では図書館専門職員養成に関する全国計画を策定するため、昭和53年10月、図書館学教育全国計画委員会(委員長故黒木 努図書館情報大学助教授)を設け、鋭意研究を進め、その成果が昭和55年5月、「図書館職員の需要に関する調査研究—図書館学教育全国計画委員会中間報告—」として刊行されました。この中間報告はその後各方面でも話題となり、反響をよびましたが、同委員会は一応任務を終了し、解散しました。しかし、その後になり「図書館事業振興法(仮称)」(案)の動きが生じ、この法案が第4章で「専門職員」について規定しているため、当部会としてはその立場上、この問題と真剣に取り組む必要があり、また、かりにこの法案がどのような経過をたどるにせよ、専門職制度の問題は当部会が根本的な面からじっくり研究する重要な課題であるという認識のもとに、昭和56年7月、当部会内に「専門職制度検討委員会」を設置しました。この

委員会は、旧図書館学教育全国計画委員会が当面していた課題も含め、専門職制度の問題をさまざまな観点から根本的かつ、総合的に検討し、なるべく早い時期に専門職制度に関する提言をおこなうことを任務としています。委員は次の方々です。

小野泰博(図書館情報大学)、北嶋武彦(東京学芸大学)、古賀節子(青山学院大学)、今 まど子(中央大学)、渋谷嘉彦(相模女子大学)、高宮秀夫(早稲田大学)、高山正也(慶応義塾大学)、常盤 繁(独協大学)、浜田敏郎(慶応義塾大学)、渡辺信一(同志社大学)のほか、故石塚正成(亜細亜大学)、故黒木 努(図書館情報大学)の12氏でした。

委員長は、7月7日開催の第1回の委員会で北嶋部会長を選任しました。昭和56年度は「図書館事業振興法」の動きがその後一時停滞していますので、委員会も休会していましたが、昭和57年度から本格的活動を開始する予定です。

日本図書館協会では目下「図書館年鑑」の編集・発行の準備を進めていますが、同編集委員会には当部会から渋谷嘉彦氏(相模女子大学)を推薦し、いろいろお骨折りいただいています。

日本図書館協会の組織委員会では、委員長が高橋徳太郎氏(国立国会図書館)から斎藤忍氏(玉川大学附属図書館長)に交代し、委員会の再編成がおこなわれ、各部会から委員の推薦方を依頼されましたので、小野泰博氏(図書館情報大学)にお引受けいただき、推薦しました。今後の御活躍を期待致します。

幹事会記録

1981年6月18日(北島、浜田、古賀、渡辺、今)

- a) 研究集会の件
- b) 会報 13 編集
- c) 九州地区図書館職員調査のまとめ
- d) J L A 全国大会の件
- e) 専門職教育検討委員会の件

1981 年 6 月 30 日 (北島, 今)

- a) J L A 全国大会の件
- b) 関東地区図書館員需給調査の件
- c) 専門職制検討委員会の件

7 月 23 日 (北島, 古賀, 高山, 今)

- a) J L A 全国大会の件

8 月 6 日

- a) 研究集会の件

9 月 21 日 (北島, 浜田, 古賀, 今)

- a) J L A 全国大会の件

12 月 21 日 (北島, 浜田, 高山, 渡辺,
古賀, 今)

- a) 会報 14 号の編集
- b) 専門職制度検討委員会の件

1982 年 3 月 29 日 (北島, 浜田, 古賀, 高山,
渡辺)

- a) 会報 14 号の件
- b) 会報特集号「図書館職員の採用制度に
関する調査」
- c) 総会の件
- d) 専門職制度検討委員会の件

部 会 費 納 入 者 (敬称略)

54 年度

黒田一之 桜井宣隆 尾原淳夫 中村初雄
福島康子 佐伯登志子 武田元次郎 山崎武
雄

55 年度

前園主計 黒田一之 桜井宣隆 山崎武雄
尾原淳夫 中村初雄 田口英子 北条正韶
遠藤英三 黒坂東一郎 佐伯登志子 武田元
次郎 弥吉光長 福島康子 室伏武 工一夫

56 年度

菅原通 赤星隆子 原田勝 宮内美智子 藤
丸昭 弥吉光長 平野英俊 浜田敏郎 渋谷
嘉彦 高橋和子 石塚栄二 今まど子 岡田
靖 七宮氏子 青野伊豫児 安藤英雄 平賀
増美 室伏武 服部金太郎 北嶋武彦 菅原
春雄 高宮秀夫 黒田一之 古賀節子 亀田
弘 前園主計 板垣とし子 神野清秀 清水
正三 津田良成 貴田春男 浜崎邦子 柿沼
隆志 石井敦 寺田光孝 松村多美子 萩原
稔 渡辺正亥 中嶋正夫 和田弘名 団野弘
之 裏田武夫 安部壘己 深井耀子 奥村藤
嗣 岡田温 竹内愨 岩猿敏生 戸田光昭
梶井重雄 西藤寿太郎 高橋重臣 角家文雄
細野公男 和泉田正宏 小倉親雄 菊地真一
黒沢淳 小川鯉一 常盤繁 源昌久 石塚正
成 岡内重信 草野正名 菅 郷子 弥永専
一 小山郁子 友野玲子 伊藤松彦 岩本宏
子 利田正男 平井祥雲 多田二郎 大野鞆
子 田口英子 宮地見記夫 永田政章 和田
吉人 浅野十糸子 原祐三 宮田平三 朝比
奈大作 山崎武雄 伊東正勝 埜上衛 久保
輝巳 石川徹也 井出翁 伊藤順 内田時哉
後藤二郎 永田清一 森崎震二 安西郁夫
佐野大和 北条正韶 山本信男 後藤純郎
中村泰正 佐々木実乗 小野賢吉 塩見昇
高鷲忠美 加藤一英 森耕一 高山正也 京
藤松子 松谷忠治 丸本郁子 黒坂東一郎
小林宏 青木次彦 林収正 志保田務

56 年度千円納入者名

松井幸子 阪田蓉子 遠藤英三 菅原通
森清 河井弘志

57年度

弥吉光長 細野公男 津田良成 田中隆子
梶井重雄 西藤寿太郎 永田政章 北条正韶
安部叁己 清水正三 宮内美智子 黒坂東一
郎

57年度千円納入者名

赤星隆子 黒田一之 亀田弘 中村泰正 奥
村藤嗣 細野公男 竹内 窓

58年度

裏田武夫

おねがい：昭和56年度より部会費が2,000円
になりました。ついてはお手数乍らすで
に56年度以降の会費を1,000円で納付ず
みの方は、各年度の差額（1年につき
1,000円）をお納め下さるようおねがい
致します。

編 集 後 記

昭和56年度2回目の会報（第14号）をお届けします。本号は主として昨年8月の第13回
回図書館学教育研究集会関係の記事を中心に
編集しました。この機会に司会・記録の労を
とられた各氏に改めて心からお礼申し上げます。

次号は、一昨年九州地区、昨年の関東地
区公共図書館における図書館職員の採用制度
に関する調査報告を中心に編集し、特集号と
して発行の予定です。なお、次号から編集責
任者を高山正也幹事におねがいしました。御
期待下さい。 （北 嶋）